

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月15日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17245

研究課題名（和文）戦後日本における労働力型都市移動と家族変動の実証的研究：親方子方関係に着目して

研究課題名（英文）Empirical Research on the Labor Type Urban Migration and Family change in Postwar Japan : Focusing on 'Oyakata Kokata'

研究代表者

奥井 亜紗子 (Okui, Asako)

京都女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：50457032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、兵庫県北部但馬地方から都市飲食系自営業に流入した移動者の事例を通じて、戦後高度成長期における労働力型都市移動と家族変動のプロセスの実証的解明を行った。京阪神を中心に「のれんわけ」で店舗展開をしてきた大衆食堂「力餅」への量的質的研究、及び「力餅」経営主を輩出してきた但馬地方でのフィールドワークを通じて、連鎖移動を通じて食堂の住込み従業員となった人々が親方のサポートのもとで独立開業するプロセスを解明した。親方子方関係は独立後も継続しており、労働力型移動者の家族形成と都市定着のプロセスにおいて極めて重要な役割を果たしてきたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

血縁に限定されない親方子方関係のもとで都市での生活基盤を確立してきた「力餅」の事例は、近代化・都市化が家族の孤立化を帰結するという一般的イメージを覆すものである。高度成長期の都市社会において、自営業に流入した労働力型移動者の形成した「閉じない家族」の存在は、親族関係や居住集団といった、狭義の家族概念の内部で議論が収斂しがちな戦後の家族研究の潮流に一石を投じる。また、企業社会の枠外にあった労働力型移動者が転出先で構築してきた相互扶助ネットワークの実態を明らかにした本研究は、企業に担保された人生設計や家族戦略が無効化している現代社会において多くの示唆を与えるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the process of the labor type urban migration and family change during the postwar high economic growth through the case study of the migrants who entered dietary self employed from the northern area of Hyogo prefecture (Tajima). With the survey of the Bistro 'Chikaramochi Shokudou' which expanded its stores in Keihanshin metropolitan, based on the 'Norenwake' system, and with fieldwork in Tajima, I found the process how they became live-in employees of 'chikaramochi' by chain-migration, and how they became independent and have their own shops with the support of their 'Oyakata'.

研究分野：社会学

キーワード：移動 自営業 親方子方 暖簾分け 農村 都市

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来、戦後農村から都市に流入した移動者は、「近代家族の大衆化」の担い手とされてきた。戦後の家族社会学において、郷里の家は長男が守り、傍系成員である次三男は都市で近代家族を形成するという「農村/都市=家/近代家族」の二項対立図式は議論の前提となってきた。

本研究代表者は、この図式の脱構築を図るため、これまで、兵庫県丹波地方、但馬地方を事例に農村 都市移動者の追跡調査を実施し、戦後高度成長期にかけて都市移住した人々の移動と家族形成に関する実証研究を行ってきた。ここで得られた知見の一つは、農村 都市移動者の移動の型によって、転出先で形成する家族のあり方や郷里との関わり方が異なることである。就学を機に移動し都市上層に流入した移動者(立身出世型移動者)は、一見典型的な「近代家族」を形成するが、西日本における立身出世型移動者には戦前から家の跡継ぎである長男が一定程度含まれており、彼らは郷里の家の継承ライン上にあつてその断絶の葛藤を甘受しつつ、「会社人間」化したために転出先地域にも軸足を置きえない存在であった。一方、自営業やブルーカラーなど都市中下層に流入した移動者(労働力型移動者)は、転出先地域に根を下ろし、「近代家族」に収斂しきれない地縁・血縁ネットワークのなかで生活を営んできた。農村 都市移動者の郷里から追跡的把握からみえてきたのは、彼らの家族が都市において画一的に「近代家族」化したのではないという事実である。

その後、研究代表者は、立身出世型移動に関しては、進学校OBを中心とする同郷団体への参与観察と現地調査を継続し、高学歴移動者と郷里に留まった人々の関係性に着目して移動と家族変動を出身地地域社会の構造変動のなかで捉えなおす研究として展開してきた。一方、労働力型移動に関しては、一中学校卒業生名簿をもとにした追跡調査であったため、事例蒐集が個別的、単発的であり、移動と定着のプロセスに関する体系的な調査研究は途上であった。

だが、一般には産業化とともに消滅する存在とみられてきた自営業層は、日本においては高度成長期開始時点において56.5%と他国と比較して際立って高く、また高度成長期を通じて農林漁業従事者が激減する一方で、都市自営業は一定して就業人口の15%前後を維持し続けてきた。日本の高度経済成長期及び当時の家族変動の全貌を捉えるためには、これまで省みられてこなかった都市自営業流入者の移動と定着のプロセス、そして彼らの形成した家族の実像を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、兵庫県但馬地方出身者が近代以降京阪神都市圏に店舗展開をしてきた大衆食堂「力餅食堂」を新たな研究対象に据え、労働力型移動と家族変動を社会構造との関連において実証的に解明することを目的とした。

「力餅食堂」(以降「力餅」と表記)は北但馬出身者が明治28年に京都寺町にて創業し、以後現在まで「暖簾分け」で店舗展開をしてきた大衆食堂である。当初は甘味食堂として餅やおはぎを扱っていたのが、大正年間にうどんや丼ものを加えた一般的な大衆食堂へと展開し、高度成長期には店舗数を拡大して昭和末期ピーク時には約180店舗を記録している。特徴的なのは、そのほぼ全店舗の初代経営主が但馬出身であり、縁故等を通じて連鎖移住し、住込み奉公を経て勤め先の「親方」のサポートのもとで独立開業していった点である。「力餅」のモノグラフ研究を通して当初設定した課題は以下の通りである。

(1) 都市飲食系自営業に流入した労働力型移動者を送り出してきた出身地地方社会構造とはいかなるものだったのか。

(2) 戦後京阪神地域で拡大する都市飲食系自営業に流入した労働力型都市移動者の移動と都市定着のプロセスの全貌の解明。「学歴」切符を持たない労働力型移動者が、都市自営業層として根付くにあたっては、どのような資本やネットワークを必要としたのか。

(3) 彼らが転出先で形成した家族のあり方は、立身出世型移動者の形成した「近代家族」のそれと比較してどのように位置づけられるのか。

3. 研究の方法

本研究では(1)「力餅」関係者への質的量的調査、及び(2)「力餅」関係者輩出地である但馬地域フィールドワーク、の二本柱を設定した。調査方法としては、聞き取り調査を中心に、事例調査、質問紙調査などを複合的に使用し、質的・量的調査を接合させることで包括的にテーマに迫ることとした。

(1)「力餅」経営主に対しては、平成29年度に力餅連合会の協賛を得て「『力餅』経営主の生活史に関するアンケート調査」を実施し(回収48通、回収率62.3%)、現存する「力餅」経営主の移動と独立開業、商売と生活の様子や近年の変化などを総合的に把握した。また、個々の経営主や配偶者に対してライフヒストリー・インタビューを実施した。また、「力餅」組合幹部が保有する関連資料を撮影・整理しドキュメント分析を行った。

(2)「力餅」関係者は、但馬地域の中でも、創業者の郷里である北但東部旧奈佐村に近接する日高町、竹野町から多数の人材が輩出されている。そのため、本研究では北但東部日高町(稲葉区)を定点観測地として、集落調査を継続すると同時に、周辺集落で「力餅」関係者を輩出した地区で関係者へのヒアリング調査を実施し、出身地と移動先の双方から労働力型移動を立体的に追跡した。

4. 研究成果

研究の主な成果

(1) 飲食系自営業流入者を輩出した出身地地方の社会構造

山がちで耕作地が狭小な但馬地方は、冬場の積雪量の多さにより古くから京阪神地域に酒造出稼ぎ等各種冬季出稼ぎ者を輩出してきた(但馬杜氏)。また、伝統的な農村社会構造である親方子方の慣行も古くから報告されている。「力餅」を多く輩出したのは、但馬地方のなかでも親方子方が戦後も強く残った北但馬であり、なおかつ北但西部が酒造出稼ぎの中心的輩出地であったのに比較して、酒造出稼ぎの比較的少ない北但東部であった。東部に酒造出稼ぎが少なかった理由として、これまで北但東部に位置する豊岡のかばん産業が産み出した労働力需要が指摘されてきたが、同時に「力餅」をはじめとする京阪神都市飲食業への流入ネットワークが堅調であったことも背景として考えられる。

(2) 移動と都市定着のプロセス

さしたる学歴切符も実家の後ろ盾もない北但東部からの労働力型移動者にとって、「力餅」への入職は、「いつかは自分の店を持つ」という希望を抱けるものであり、学歴社会の文脈と異なる、オルタナティブな「立身出世」ルートとして認識されていた。経営主の多くは、労働条件の過酷な住込み従業員時代を経て、親方のサポートを受けて独立開業(暖簾分け)を果たしている。ここには、出身地においては子方的位置にあった労働力型移動者が、都市自営業として成功して親方となり、子方である番頭を持つ、という伝統的な慣行の文脈における「立身出世」の側面があったことも指摘しておきたい。この親方-子方(番頭)の関係は、兄弟弟子を含む「系統」として独立開業後も継続し、移動者である経営主にとっては、商売面のみならず、冠婚葬祭等の日常生活面をも包含する最も基礎的な相互扶助のネットワークとして機能してきたことが明らかになった。

また、「系統」と同時に、「力餅」経営主を会員とする力餅組合、及び京阪神力餅組合の連合組織である力餅連合会組織があり(「組合」)同郷かつ同業のネットワークとして機能してきた。「系統」が伝統的な親方子方による縦のネットワークであるのに比較して、「組合」は経営主同士の対等な横のネットワークであり、保険の一括加入、各種親睦の集い、また新規開業改装時の資金融通のための「力餅ローン」(大阪組合)など、様々な活動を展開してきた。こうした伝統的な関係性と近代的な組織の重層的なネットワークのなかで、「力餅」経営主は都市での定着を果たしてきたといえる。

(3) 飲食系自営業者が形成した家族の諸相

「力餅」経営主への量的質的調査から、労働力型移動者家族の諸相がみえてきた。まず、近代家族の理念型との最も大きな違いは、商売を第一義とした家族の在り方である。初代経営主の約8割は独立開業と同時に、もしくはその前後1,2年で結婚する。これは夫婦単位での商売を前提としたものであり、独立に向けての準備に不可分なものとして「嫁探し」は付随していた。また、商売をしながらの子育ては、近隣や商店街の人々の日常的な助けなしには成り立たないものであり、ここにも育児専従者として専業主婦を包含した近代家族との著しい相違がみられる。

その一方で、「力餅」経営主が自営業独自の継承規範(家産と家業の継承規範)を有していたかという点、必ずしもそうではない。食堂経営という飲食系自営業の労働環境の厳しさは、子弟に対して素朴な店の継承期待をかけることを許さなかったのであり、それは「力餅」経営主の子弟の大学進学率が世間一般よりも高いという結果にも表れた。子弟の高学歴化は、後継者不足の直接的原因となって、近年の廃業の急増と結びついている。

成果の位置づけと残された課題

(1) 労働力型都市移動と親方子方

労働力型都市移動は近代化の必然であるが、そのプロセスの実証的検討を通して浮かび上がるのは、それがいかに伝統的な社会構造との重層性のもとに成立していたか、ということである。京阪神都市社会の発展のなかで商売を軌道に乗せ、頭角を現した親方は、郷里からの連鎖移動の牽引役として複数の番頭の独立開業と都市定着を支えてきた。親方子方は日本の村落社会構造を探る基本的概念として、古くから「家」研究の主要な論点ともなってきたが、戦後日本の農村-都市移動のダイナミズムとの関連のもとに親方子方にアプローチした本研究は、親方子方の現代的な展開として意義を持つものと考えられる。

(2) 「力餅」と京阪神都市地域社会史

明治期に京都から拡大した「力餅」であるが、戦後は特に大阪の都市社会の発展に伴って、大阪において店舗数が膨れ上がった(最盛期100店舗超)。「力餅」店舗の地理的分布をみると、いわゆる「インナーリングエリア」(戦後重化学工業化にともない出現した低所得労働者を対象とした木賃住宅密集地域)を中心に展開しており、発展しつつある新興地域に店を構え、自治会、商店街振興組合の役職、社会福祉協議会や消防団、納税協会等各種地域組織の中心的な担い手として都市社会に根を下ろしていった「力餅」経営主の姿を捉えることができた。従来、都市自営業層は静態的な旧住民として位置づけられることが一般的であったが、戦前・戦後から高度成長期にかけての京阪神都市地域社会の伸長と期を一にした「力餅」の歴史は、都市地域社会に根を下ろす担い手がいかにして育ってきたのかを示唆する重要な記録としての価値を有すると考えられる。

(3)「京阪神大衆食堂の社会史」への展望

最後に「力餅」調査の過程で、京阪神地域にある類似の大衆食堂（うどん、丼物とおはぎ等の甘味を扱う食堂）が、軒並み力餅と同じ北但東部出身者の暖簾分けによって店舗展開してきたことが明らかとなった。京都を中心に展開するいわゆる「餅系食堂」千成餅食堂、相生餅食堂、弁慶餅食堂、大力餅食堂や、大阪府堺市を中心とするかどやは、力餅に比べると店舗数規模は少ないものの（最も多い千成餅食堂で最盛期 33 店舗）、力餅と同様地域に密着して京阪神に生きる人々の胃袋を支え、庶民の食文化の一端を形成してきた。本調査では、力餅調査と並行して、他の餅系食堂にもヒアリング調査を実施し、そのルーツや展開のプロセス（力餅の暖簾をもらえなかった人が始めた/力餅創業者の同村落出身者が力餅にあやかって開業した、など）に迫ったが、全貌の解明は途上であり今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

奥井亜紗子, 2019, 「大衆食堂経営主の『暖簾分け』と同業ネットワーク 『力餅食堂』を事例として」『社会学雑誌』第 35 号, 近刊

奥井亜紗子, 2018, 「京阪神地域における大衆食堂経営主の生活史と同郷ネットワーク」『現代社会研究科論集』第 12 号, 京都女子大学大学院, 45 - 64.

〔図書〕(計 1 件)

< 報告書 >

奥井亜紗子, 2019, 『力餅食堂経営主の生活史 平成 29 年ン度力餅経営主アンケート調査結果報告 』（平成 28～30 年度科学研究費補助金（若手研究（B））研究成果報告書）

〔その他〕

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。